

児童が主体的に学習に取り組む小学校高学年ゴール型授業の研究

－内発的動機付けを図る工夫と学習としての評価

(Assessment as learning)に注目して－

石坂 晋之介 (埼玉大学)

1. 目的

小学校高学年のゴール型の授業実践において、内発的動機付け¹⁾と学習としての評価(A as L)²⁾に注目し、主体的に学習に取り組む授業開発及び効果検証を行うことを目的とする。

2. 研究方法 (MS ゴシック 10.5 ポイント)

- 1) 対象者：埼玉県内 K 小学校第 6 学年 30 名
- 2) 調査方法：自己決定権の付与、教材化の工夫、学習としての評価(A as L)の導入
- 3) 分析方法：体育授業用動機づけ尺度の質問紙調査²⁾、学習カードの記述分析、動画分析、

3. 結果と考察 (MS ゴシック 10.5 ポイント)

- 1) 内発的動機付けについて、下位群の児童に有意差が認められた(表 1)。学習課題を自己決定できたことが効果的であったと考察する。

表 1 内発的動機付けの平均値の変容 n = 30

		単元前		p 値
		単元前	単元後	
上位	MEAN	5	4.8	.152
	SD	0	0.40	
中位	MEAN	4.45	4.48	.797
	SD	0.33	0.49	
下位	MEAN	2.65	3.13	.013*
	SD	1.09	0.83	

* p < 0.05

- 2) 学習カードの記述から学習としての評価(A as L)の活動により、自らの学習課題について振り返り、自己調整している様子が見られた(表 2)。

表 2 学習カードの記述分析 n = 30

概要	割合 (人数)
学習課題と正対した記述	90% (26 人)
学習課題と正対していない記述	10% (3 人)

- 3) 抽出児童 6 名(動機付け水準上位中位下位、各 2 名ずつ)の動きについて数値の向上が見られた(表 3)。() 内の数字は得点に至った回数である。教材化の工夫と学習としての評価が技能の向上につながったと考察する。

表 3 抽出児童 6 名の動きの変容

ボーリングゲーム	第 1 時	第 4 時	第 7 時
ボールを持って運ぶ (ドリブル)	14 (7)	13 (4)	11 (5)
パスをもらう	11 (2)	14 (4)	16 (8)
パスを出す	9 (1)	18 (0)	16 (2)
得点エリアに侵入	11 (9)	9 (4)	12 (9)
サッカー	第 1 時	第 4 時	第 7 時
ドリブル	4 (2)	12 (1)	13 (3)
パスをもらう	5 (0)	15 (3)	13 (4)
パスを出す	6 (0)	21 (1)	13 (2)
得点エリアに侵入	3 (2)	9 (3)	10 (4)

4. 結論

本研究では、学習課題を自己決定し、課題を解決できる教材化の工夫と自己の学びを調整する学習としての評価(A as L)により、主体的に学習に取り組む授業開発を試みた。その効果として、内発的動機付けは下位群に有意差が認められたこと、動機付け水準に関わらず技能の向上が見られたことの 2 点が明らかとなった。

5. 主な参考文献

- 1) E.L.デシ. R.フラスト. 桜井茂男(1999).人を伸ばす力.新曜社.pp201-202
- 2) 藤田勉・佐藤善人 (2009) . 小学生と中学生の体育授業における動機づけの比較検討. 鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編, 61 : pp43-59
- 3) 石井英真 (2023) .中学校・高等学校 授業が変わる 学習評価深化論.図書文化社.p135